

# 整備機器

## 新商品

小野谷機工(株)

パケサポリフト  
「PSL-45」

### 袋詰め作業サポ ート機能に特化

の作業に適した専用のリフターが必要となる。

ホイール付きのままの状態では滑ってしまい持ち上げにくい。その作業がクルマー台につき4回。繁忙期にはそれが延々と続く。

小野谷機工(株) (福井県越前市) が開発し商品化したリフトは、タイヤの持ち帰りを行うときの作業をサポートするもの。パッケージ&サポートリフト、略してパケサポリフトと呼称する「PSL-45」を新発売した。商品開発本部サービス機器開

発まで装着していたタイヤを梱包用の袋(通称・タイヤ袋)に包み引き渡す。タイヤ店のスタッフがトランクルームや車内後部座席に運び入れるケースがほとんどに違いない。タイヤ袋にタイヤを

商品ナンバーの「45」とは、リフトの持ち上げ能力が45キロだということに由来するそう

を操作。作業がしやすいつい任意の高さまでリフトをアップさせる。上からタイヤ袋をかぶせ、タイヤを180度回転させる。リフト下部の2本のローラー、本体支柱サイド部に斜トサイズだ。揚程は800ミリ。使用する空気圧は800kPa。リフトの速度は約250ミリ/s。本体にエアの取り口用プラグを備えた。ここから圧縮エアを使うことができ、三田村さんは「活用方法はいろいろと可能で、作業環境や条件によりエアの使用分けができる」と説明する。

タイヤ整備の現場で「持ち上げる」「運ぶ」という作業を担うのがリフターだ。ただ、ひと口にタイヤをリフトアップするといつても、タイヤチェーンジャークのセンタートーブルに載せるとき、ホイールバランスの軸に取り付けるときでは、タイヤの位置や作業の姿勢がまったく異なる。タイヤを倉庫に格納するとき、クルマのトランクに運入れるときももちろん違う。従って、それぞれ

三田村さんは「なにげない作業なのだが、腰にかなりの負担をかけている」と指摘する。「最近ではSUVやハイト系軽自動車が増え、それとともにタイヤが大口径化・重量化する傾向にある。また、クルマの大型化・ハイト化とともに高床化されれば、持ち上げる移動量もそれだけ増える」と続ける。

実演デモに際して、三田村さんは「PSL-45」をクルマーの架台(トランク)付近へと移動させる。4輪キヤスター付きなので、機動性が高い。

三田村さんがタイヤ上部で袋の口を縛る。架台の高さにリフトを合わせると、袋に入ったままのタイヤを架台に転がした。梱包されたタイヤの積み込み作業を終えた。

物を「持ち上げる」「運ぶ」。その物が重ければ重いほど、また作業に携わる時間が長ければ長いほど、作業者にかかる肉体的負担は大きくなる。単純なことだが、作業現場で軽労化・省力化を図るのであれば、すべての作業での動作について洗い出し、作業者のどこにどれくらいの負荷がかかっているのかを理解する必要がある。タイヤ整備の現場では「持ち上げる」「運ぶ」作業が実は想像以上に多い。

夏用から冬用へ、逆に冬用から夏用へとタイヤを交換する需要シーズン。

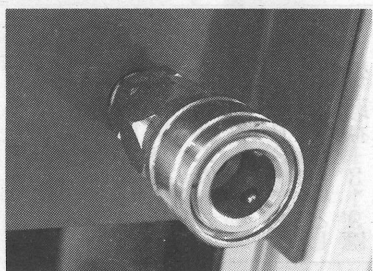
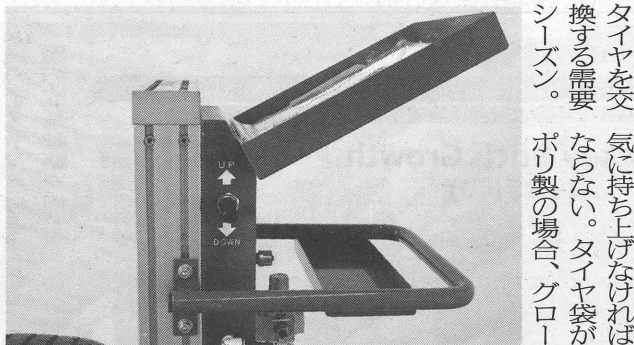
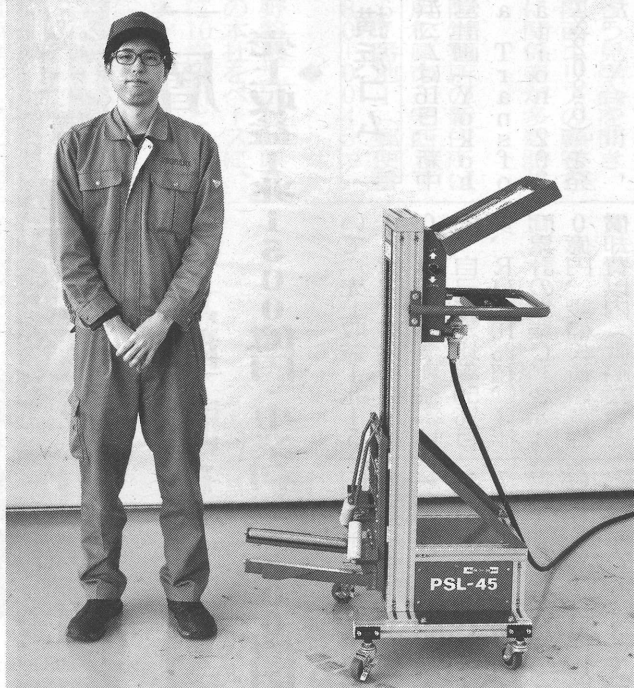
発部主任の三田村廣大さんが解説する。

梱包する作業は前かがみの姿勢で行う。それをクルマーのトランクルームに入れようとするば、中腰の姿勢から一気に持ち上げなければならぬ。タイヤ袋がポリ製の場合、グロ

これら一連の作業シーンで軽労化・省力化を果たすことはできないのだから、アイディアを具現化したのがこの「PSL-45」だ。

2本のローラー、合わせて4本のローラーがタイヤをホールドしながらスムーズに回る。三田村さんがタイヤ上部で袋の口を縛る。架台の高さにリフトを合わせると、袋に入ったままのタイヤを架台に転がした。梱包されたタイヤの積み込み作業を終えた。

「便利で使いやすく」を形にしたこのパケサポリフトとなった。



(写真上から)本機と三田村さん。本体サイド部に配置されたスイッチ。リフト部分のアップ、エアの取り口用プラグ。右写真はタイヤをリフトに載せた状態。

